入選（高学年の部）

「オレンジと月」

東京都　星美学園小学校 四年

小杉 倫子（こすぎ りんこ）

「あの日…見たオレンジが忘れられないよ。」

「月がきれいだな。今夜。」

かわいい孫。いつだってそれが私の立ち位置。だけど、あの日……。波打ちぎわ、ぎりぎりの境界線に築かれた砂の城のように、よせては返す波に流されて私達の関係もくずれていった。

「おはよう。」

「暑かっただろう。じゃ、行こうか。」

今日も朝からむしている駅のホーム。祖父は、ひたいに汗をにじませながら今朝も私を笑顔でおむかえ。

いよいよスタートしたじゅくの夏期講習。私は、電車で五つ離れた駅まで通う未来の受験生だ。と、いっても電車通学は不なれ。だからといって共働きの両親に付きそいは期待できず。そんな両親にかわって祖父はわたしの親がわりをしてくれていた。祖父は、私の住まいのとなりの県から朝早くやってきて、私と待ち合わせをし、じゅくまで送る。そして、じゅくが終わる時間になるとまたむかえに来てくれて、私を家まで送り届け、再び自分の住むとなりの県まで帰って行く。これを毎日。はっきり言って、重労働以外の何ものでもない。祖父の年れいを考えれば尚さら。そう分かっていたのに……。

「いつまで待たせるの。もう、むかえに来るのがおそい。」

ある日、祖父はじゅくの終わりの時間になってもむかえにやって来なかった。私は、炎天下の中ずっと待っていた。交通きかんの乱れで約束の時間に来れなかったという祖父に対し、私は暑さも重なりイライラがばく発し、それでも急いで来てくれた祖父に文句を言った。それからだった。以後は、頼らなくなった。

「一人で行くからいい。おじいちゃんなんて必要ない。」

私は公言通り一人で電車通学をやってのけ、それが慣れて来た八月半ばの夜の事だった。

夕飯を終えた頃、電話が鳴った。おばあちゃんからだった。受話器をにぎる母の様子からして、なんだか悪い予感がしてならず、電話を終えた母の顔をすぐにのぞきこめば、おじいちゃんが農作業の途中で暑さで倒れたとの事だった。明日朝一ですぐにでも様子を見に行こうと仕事の予定調整を始める母。

「私が行く。私に行かせて。」

私は翌日、電車に飛び乗って祖父の元へむかった。思ったよりも軽症で夕方二人でえん側へ座って空を見上げた。しずみかける夕日をあびて白せきの私達の顔がオレンジ色に染まる。あの日以来だった。こうして祖父との時間をすごすのは…。それから私達の上には銀紙でも張ったような明るい月が出て…。

「いつも、ありがとうね。」

あの日の出来事は私達の中で伝説。後にも先にも無い、オレンジ色の月。